

繰り返される転居とネグレクトの特徴

- 「漂流する家族」への地域臨床の可能性を探って -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
八木 安理子

筆者が勤務している児童家庭相談の場において、地域との関係が希薄なネグレクト家庭が転居を繰り返すことで、地域との関係性が積み重ならないまま漂う姿に無力感を感じていた。まだ研究が少ないネグレクトに特化して、今まで関わってきたネグレクト事例の分析から、ネグレクトの特徴や転居の背景を明らかにし、そこから地域臨床のアプローチ方法や支援の可能性を探ってみた。

転居は児童虐待や虐待による死亡事例と関係があり、転居が家族を危機的な状況に陥らせることが明らかになった。その中で、ネグレクトは身体的虐待等の他の虐待に比べて子どもに暴力や暴言などの行為として向かうのではなく、「何もしない」という根本的な違いが浮かび上がり、他の虐待と区別したネグレクトへのアプローチの必要性を示唆された。

虐待者の特徴としては、様々な人との不安定で希薄な関係性と、計画的未来志向や建設的構築性の低さが見られた。ネグレクト家庭の多くが、貧困や失業など経済的問題、支援の欠如、生育歴など様々な問題を抱えており、それが積み重ねによる成功体験や自己決定による成果の獲得を困難にし、自尊心の育ちを妨げ、社会に対して無力感と不信感を抱いてしまう。社会の階層的偏在の問題や、経済的な不利や困難の複合的側面という背景を考えると、個人の問題としてではなく、社会的環境的な要因として捉え、社会的コミュニティ的な介入という発想が地域臨床に必要であるといえる。

事例の分析から、家族の持つ問題や困難さに対して地域が補完的な役割を果たし、人との出会いや地域との関係性が、そだちと変化への可能性を与えてきたことが明らかになった。そこで地域臨床として、第一に地域社会との関係性の生成と環境的要因へのアプローチが挙げられる。家族やそれを取り巻く地域の機関や人々に直接的間接的に介入的に関わることである。事例の分析から6パターンの支援が抽出され、「家族のニーズに合わせて、福祉サービスや制度、子育て情報を提供することによって、家庭や子どもにアプローチする」ことが有効な支援であることが明らかになった。

次に、家族の主体性の生成である。環境に流されるように不安定に「漂流する」ことから、主体的に目的を持って人生を選んでいくことが目標となる。「漂流」から、自ら舵をとって、目標を持って地域という「港」に辿り着き、選んだ港に楔を落としてつながっていく。支援者は寄り添う姿勢が、ネグレクトに対する地域臨床の中核になると考える。

「転居」が家族のリスクを高め、「漂流」への促しとするのではなく、「転居」を地域との出会いやかかわりのスタートとして位置づけることができるなら、地域臨床の可能性として加えられることになる。